

読み取りの対象と方法を明確にした説明的文章の授業実践及び改善プランの作成

—文章の特徴を明らかにする教材分析の整理を基に—

教育実践高度化専攻

授業実践リーダーコース

P09023E

近藤裕美

I. 背景と目的

国語科の授業においてテキストに基づいて授業を組み立てる際、文章の内容を読み取ることが第一の段階であるが、現在では内容を読み取ることには焦点を当てることが少なくなっている。さらに、「どうやって読み取ったのか」という読み取りに関わる言語技術を教えることが十分にできていないため、子どもたちに「何の力が付いているのか」ということが実感されにくく、これが学習意欲の低下の一因となっている可能性がある。

内容を読み取ること、更には読み取りの技術を教えるためには、提示するテキストの教材としての特徴を把握することが大切であり、そのための教材分析が必要とされる。しかも、国語科においては一つの教材に対して多方面からアプローチし、様々な要素を複雑に組み合わせながら学習過程を設定する必要があるため、教材分析も多様な角度から行う必要がある。しかし経験の少ない教師にとってこのような作業は困難を極めるため、教材分析の枠組みや観点をある程度整理することが求められている。

以上の問題意識より、研究対象を説明的文章に絞り、以下の4つを研究の目的とした。

- ①文章表現に関わる教材分析の観点を整理し、教材分析のフレームワークとしてまとめること
- ②教材分析の結果をまとめ、明らかになった教材文の特徴を単元の指導過程に反映させること
- ③読み取りの言語技術を身に付けさせるという観点を取り入れた単元の構成及び授業実践を行うこと
- ④読み取りの言語技術の定着及び生徒の認識状況を評価し、授業改善プランを考案すること

II. 説明的文章教材における指導内容とその系統性の検討

まず曖昧であった「説明的文章」の定義を文学的文章と対比することで定め、教科書の中で説明的文章に分類される教材を明らかにした。続いて学習指導要領「読むこと」の指導事項を分析した。その結果、中学校段階における説明的文章の「読むこと」に関わる指導事項においては文章構成や筆者の表現意図に関わることに重点が置かれており、これらの

事柄について3年間にわたって系統的に指導することが求められているという結論を得た。

III. 教材分析の過程と単元目標の決定

(1) 教材分析フレームワークの作成

「メディアリテラシー」「小さな労働者」「考えるイルカ」の3つの単元に含まれる教材について経験豊かな教師の指導を受けながら文章の特徴について教材分析を行った。次に3つの教材分析の過程を振り返り、着目した観点を3つの分類項目「ア.書かれている事柄」「イ.筆者の述べ方」「ウ.筆者のものの見方や考え方」(藤田伸一氏の分類法)に分類し、説明的文章の特徴を分析するためのフレームワークとしてまとめた。フレームワークの項目は学習指導要領「読むこと」の指導事項と照合し、整合性を検討した。

(2) フレームワークを用いた教材の特徴把握

定めたフレームワークに従って先に行った教材分析の結果を分類・整理し、3つの表を比較することで一つひとつの教材の文章の特徴を検討した。

(3) 単元目標の設定

教材分析の結果をもとに学習指導要領「読むこと」の指導事項の中から指導可能なものを抽出し、これに教科書における教材の扱われ方を加味して、各単元の単元目標を定めた。

IV. 単元の指導過程の設定

定めた単元目標を基に、生徒の実態を考慮しながら3つの単元の指導過程を設定した。またその中の文章の読み取りにあたる活動を整理し、指導することができる言語技術を「身に付けさせる読みの力」として明示した。

V. 「考えるイルカ」の授業実践とその評価

授業実践は「小さな労働者」「考えるイルカ」について行ったが、以下に考えるイルカの授業実践とその評価について記載する。

単元目標(表1)に従い指導案を作成した。K市立Y中学校二学年5クラスに対し授業を実施し、ワークシートやアンケート等の記述から評価した。読みの力に関連した目標についての評価結果は以下の通りであり、これに対応した改善が必要と考えられた。

表1:「考えるイルカ」の単元目標と読みの力を身に付けさせる手立て

「考えるイルカ」(全5時間)	
単元目標	
○事実と考察を読み分けたり、実験結果と文章全体との関係に着目したりすることにより、作者の論述の仕方をとらえる。 ○文章に書かれている実験の手順とその結果、結果に対する考察及びその根拠を図表に整理し、各実験の手順及び結果や実験相互の関係性について理解する。 ○「三段論法」「推移性」「条件性弁別」などの抽象的な語句の意味を理解する。	
「身に付けさせる読みの力」	
①文章をもとに図を書き表す力を身に付ける	
②物事を文章で説明する場合、説得力を持たせるような書き方を知る	
時	読みの力を身に付けさせる学習過程
①	2 イルカに行った二つの訓練についての記述を図表にして整理する。
	3 逆方向の実験についての記述を図表に整理する。
	5 課題を各自力で解く。→実験の過程の文章を図示する。
②	1 文章を通読し、文章の問いは何であるかを理解する。
	4 「考えるイルカ」の論の進め方を学ぶ→ワークシートに印刷されている文章構成図の見出しに言葉を当てはめる→序論→問い→実験→考察→結論という作者の説明の仕方を理解する
	5 課題を自力で解く→本文をおおまかに4つに区切り、区切ったかたまり毎に見出しをつける→作者の「問い」と「結論」を読み取る

○単元目標「作者の論述の仕方を捉えること」に関連した評価規準の達成度は他に比較して低く、単元終了後の生徒の自己評価からも同様の傾向が示された。

○アンケート結果から、「身に付けさせる読みの力」として設定した「①文章をもとに図を書き表す」「②説得力を持たせる書き方を知る」を、今後も使える読み取りの技術と捉えている生徒は、2割ほどに留まっていた。

VI. 「考えるイルカ」の授業改善

上記のような評価結果を踏まえ、考えるイルカの指導案の改善を試みた。読むことに関連した改善のポイントは次の通りである。

○「作者の論述の仕方を捉えること」に関わる学習活動を増加させる。現時点では第4時後半・第5時と単元後半で扱っているが、単元の全体にわたって学習活動を設定する。

○三段論法・推移性は文章の理解の流れの中で理解するに留め、取り出して教えることを避ける。「一般化できる知識」として取り出す事項は「身に付けさせる読みの力」で挙げた2つの項目(①文章をもとに図を書き表す②説得力を持たせる書き方を知る)に限定する。

○「身に付けさせる読みの力」を生徒に提示する際、

それまでの「書き表す」「書き方を知る」などの記述を改め、「読む」「能力」としての記述に統一する。

VII. 全体の考察と今後の課題

(1) 教材分析のフレームワーク

経験豊かな教師が経験知として保持している教材分析の方法をボトムアップする形でフレームワークを作成した。このフレームワークは、学習指導要領の「読むこと」の指導事項との間に一定の関係性持つものであり、今後の教材分析にも充分使用可能と考えられた。しかし、「表現」や「ものの見方考え方」に関する指導事項の関係をより明確にする等、フレームワークの項目の更なる整理が必要である。

(2) 教材分析の結果と単元の指導過程

本研究では、「教材分析により明らかになった教材文の特徴」「これに整合する学習指導要領読むことの指導事項」「教科書における単元の位置づけ」から単元の目標を決定した。この3つの関係性について整理することで、教材文のどの特徴をどの指導事項に反映させて授業を行うのか、という授業の観点が明らかになり、教材文の特徴を生かした授業づくりが可能になる。このことは本来多くの教師が日常的に行っている作業であるが、改めてその過程を整理したことで、経験の浅い教師が教材分析を経て授業方針を決定する際の思考の整理に役立つと考える。

(3) 「身に付けさせる読みの力」

本研究で扱った3つの教材のそれぞれについて設定した「身に付けさせる読みの力」は表2のとおりである。

表2:各単元における「身に付けさせる読みの力」

単元名	「身に付けさせる読みの力」
メディアリテラシー	①対になる事柄や概念が文章に登場したとき、対立の構造を図示して示し、それぞれに関わる説明や具体例分類・整理しながら読み進める能力
小さな労働者	①文章や写真から読み取った事柄を5W1Hに整理する能力
考えるイルカ	①複雑な文章を図に直すことで分かりやすくして読みとる能力 ②文章の説明の流れを読み取る能力

共通する「身に付けさせる読み取りの能力」を、「関係性を踏まえながら文章を要約する方法」と捉えることが可能である。僅か3つの教材の共通点から導いた結果とはいえ、読みとりの言語技術として身につけさせたい力の一つといえよう。今後、より多数の教材の特徴を分析し、「身に付けさせる読み取りの能力」の共通点を更に一般化できる形で明らかにすること、そして、これを技術として身につけさせるための方策を考えていくことが必要である。

修学指導教員：増澤康男・溝邊和成
指導教員：増澤康男